



幻影 ①

丹後 茂

海員随想

船は門司港でセメントを積んでいた。奄美大島・名瀬行きである。春先の天候は変わりやすく、いつ雨にならないとも限らない。セメントは少しの雨でもすぐ荷役中止にだから、いつでもハッチを閉められる態勢で作業していた。慣れない門司の街をさまよ、飲み屋に入って法外な料金を請求されてはかなわない。どこか安いところはないかとキョロキョロしながら歩いた。

「おい、ここはどうだ」

相棒の斎藤が言った店は、食堂みたいだ。酒はあるようだが…。

「女はいないぞ」

相棒や健次より先輩の操機手、西本は気に入らないようだ。

「女がいたら高いよ」

斎藤は酒好きで、早く店に入りたようだ。

「仕方ない。ここで我慢するか」

西本は、のれんをくぐった。

2人の女性 出会い

それでも女は2人いた。丸顔で中肉中背の30過ぎと20代半ばの細面の痩せた女だ。

「いらっしやませ」

奥にいたママらしいのが声を上げた。アクセントがおかしい。健次は中国か韓国だと直感した。「いまさら出て行くわけにもゆくまい。仕方がない少し飲んでいくか」。そんなことを考えていた。西本も斎藤も同じ考えのようだ。西本は「こんな店を選びやがって」と斎藤をにらんだ。

とにかく4人掛けのテーブルに座り酒を注文した。おかげはなるべく安いものを取った。女が1人、座れないので椅子

子を持ってきた。ほかにお客はいない。4人掛けのテーブルが五つあったろうか。2人の女は日本人である。どちら

もあまり美人ではないが夕子は悪くないようだ。

少し酔いが回ってきた。西本は若い方の女を横に座らせた。おかげで健次は隣から持ってきた椅子に座る羽目となった。「こんな店」と言っていた西本は、若い方の女の肩を抱き、酔ってきたのかすつかりご機嫌だ。まあいつものことなのだが…。

ママはカウンターの中心にいて酒や料理を運ぶときしか出てこない。奥にはマスターらしき男が見え隠れする。女に聞くと、マスターとママは夫婦で中国人という。やはり健次のカンは当たった。

「ここは安いから安心してゆっくりして」

30過ぎの女が言う。このせりふで今までいくら取られたかと思うと安心できない。

その時、お客が十数人、入ってきた。言葉が日本語ではない。中国人だった。女たちはそちらに酒と料理を運んだ。健次たちは「帰るか」と顔を見合わせた。中国人の席へ酒と料理を運び終わると、女2人は元の席に戻ってきた。これでは帰ることはできない。

そのうち中国人のグループは女2人に何か言い付けた。中国語らしく全く分からない。女たちはすぐ理解してレコードをかけた。

ダンスが始まった。女が席に來ないので、ダンスで奪い取るつもりようだ。西本も斎藤もダンスは踊れない。健次はムラムラと競争心が湧いてきた。音楽の切れ目を狙って若い方の女に近づき、手を取った。相手は笑みを返した。それからは女を離さなかった。

(続く)